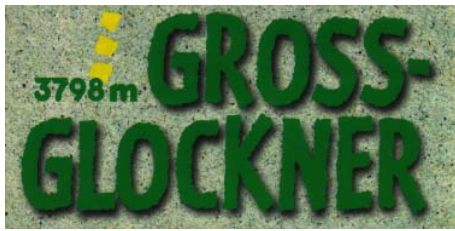


2.1. オーストリア最高峰 Grossglockner3798m



# 「Grossglockner 登頂」

高度：3798m オーストリア最高峰

日時：1998年7月6日（火）午後四時半

天候：曇り時々晴れ、雲量約50%

Guide：Ernst Rieger



## オーストリア最高峰 Grossglockner,3798m に立つ (1998-7-6)

ウィーンからの最初の年賀状に「滞在中の私生活の目標は Grossglockner, 3798m 登頂」と書いた。二年前の夏休み、Heiligenblut の登山事務所で可能性を調査した。

1. ガイド付きなら初心者でも可能。ガイド料は、、、。
2. 必要道具はリュックサック、アイゼン、、、。身体以外は殆どレンタル可能。
3. 事前の身体作りが大事。ジョギング、ハイキング、サイクリング、水泳、、、。
4. 時期は7月前半が良い。一、二週間前に観光事務所に連絡してガイドを予約。
5. 登山は二日だが、一週間の休暇をとって来い。天候を見て登山日を決める。

昨年は公務のシンポジウム準備で身体作りがままならず断念。今年は年始めからジョギング、ハイキングを中心に準備。スキー場へも滑るより山靴持って歩きに行くと言った具合。週一度は会社から家までの7kmを走る等、ウィーンマラソンを含め幾つかのレースにも参加。5月半ば Heiligenblut 観光事務所に手紙を書いて英語の話せるガイドを依頼。この登山計画は誰にも事前には話せなかった。一つには人が心配するだろう事、二つには結局登れず仕舞に終わるかも知れない事を恐れたから。話は帰ってくるまで待つ事にした。今、話せる。

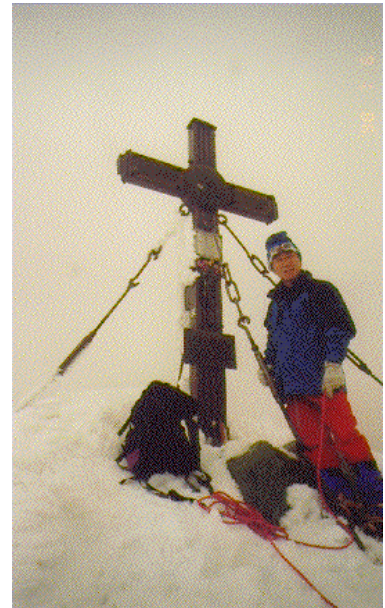
### 7月5日(日)

万々に備えて、数通の書き置き。ウィーンは雨なるも好転を期待して予定通り10時出発。使えそうな前道具を全部持参:アイゼン、ゴアテックスのアノラック・ズボン、革の登山靴、サングラス、スパッツ、、、。列車とバスで Heiligenblut のペンションに夕方7時着。晴れ間見えるも気圧計は天候悪化を予想させる。心配。夜9時半ガイドの Ernst から電話。英語で始めたがいつの間にかドイツ語になる。明日から行動開始だと言う。登頂は火曜か水曜か、緊張感が高まる。明朝8時に会いに来る由。スケジュール打ち合わせとか道具点検だろうと予想して就寝。

### 7月6日(月)

- 08:30 : Ernst 到来。「天候は下り気味。今日登る!」「今日?これから?」彼の車に持参装備をすべて乗せて Franz-Josefs Hohe へ出発。
- 09:30 : リュックに全てを入れ、ストックを手に Franz-Josefs Hohe、2400m を出発。先ず降る。ザイルバーンの中に数人の日本人、登頂成功を祈って呉れる。
- 10:00 : この国最大の氷河 Pasterze、2200m を横断。登り開始。小さいきれいな花が散見。
- 12:00 : 朝食プラッツ Fruestucks Platz、2800m。Franz-Josefs Hohe を下に見て軽食。慌てて出発したためか、手作りの稲荷寿司を宿に置き忘れて来た事に気付く。アイゼン・ザイルを装着して Hofmannskees 横断に出発。
- 13:00 : 視界良し。氷河上方の Johnnisberg、登路前方 Aldersruhe の山小屋が見える。あれが今夜の宿 Erzherzog-Johann Huette だ。
- 13:30 : 肩の荷と雪の付いたアイゼン靴が重く、雪とストレスで疲労感を覚える。太股が痙攣しかかる。小屋は見えているのになかなか届かない。そこから先の登山の気力が萎えそう。今日はあそこまででいいんじゃないか。
- 14:30 : Erzherzog-Johann Huette、3450m。既に日本での最高到達点、北岳の3192mを越えている。Frittaten Suppe で息をつく。Ernst はビールを飲んでいる。いいのか?
- 15:00 : アイゼン・ザイルを装着し小屋を出発。ここからは空身。最低限の荷を Ernst が背負う。

- 15:30 : 登路は急峻化。35度、3600m。私の命はザイルと Ernst 様次第。
- 16:00 : 「ストックを道脇に置け」と言う。3700m。ここからはアイゼンと手での岩登り。勾配ときに 70 度。
- 16:15 : Kleinglockner、3770m。見晴らしは良い。目先のギプフェルクロイツが大きく見える。更に狭い雪と岩の道を 10m 降って 30m 登れば頂上。ザイルで繋いでいなければ無理に思える。
- 16:30 : Grossglockner、3789m。大きなクロイツ。余り寒くない。風もない。360 度眺望。南にイタリアのドロミテ、西にキッツビューラーホルン、無数と思える四方の 3000m の峰。豪快、絵的、贅沢、photogenic、fantastic、impressive、..。写真。ビデオの電池切れが悔やまれる。
- 16:45 : 去り際に「山の唄を」と Ernst。「山よ岩よ吾らが宿り、又来る時にも笑ってお呉れ」とやったら涙が出てきた。嬉しさと、二度と来れまいとの感傷と。Ernst も口ずさむ。
- 17:00 : 下山開始。降りはこちらが先行。Ernst が上で支えて呉れる。ずるるっ!とスリップ数回。Ernst がしっかりホールド。3700m でストック回収。遥か下方氷河の一隅に猫の顔に見える大きな岩を発見。Ernst としばし会話。途中、四人組登りパーティに会う、3500m。
- 17:30 : 小屋帰着。ビールとワインで満足感と達成感を味わう。Ernst がアイゼン捌きと岩登りの基礎技術を誉めて呉れる。食事は今一。気圧の低いこの高度では仕方ない。稲荷寿司を思い出す。女房、友人、自分自身にカード数枚。
- 21:00 : 四人組パーティ帰着。外はまだ明るい。お互いに祝い合う。ドイツ語。
- 22:00 : 就寝。寒い。



7月7日(火)曇。昨日登って正解だった。

- 05:30 : 起床。パッキング、ストレッチング。水筒の水で猫風に片手で洗顔。日記を兼ねてカード数枚。
- 07:00 : 朝食。紅茶だけが旨い。黒パン二枚、義務と考えて詰め込む。
- 08:00 : ザイルを繋いで出発。アイゼンはなし。Ernst は尾根の南側の別ルートを取る。トレール無き雪原をわが家の庭を歩くように降りて行く。雪深い。時に腰までめり込む。暖かいから雪が締まっていないのだ。視界は悪い。下方の Pasterze 氷河も Franz-Josefs Hohe も見えない。却って恐怖感がなくて良い。途中アイゼン装着して凍った斜面を降る。
- 09:00 : 朝食プラッツ、2800m。アイゼン、ザイルをはずす。
- 10:00 : 最低点 Pasterze、2200m に帰着。Ernst に感謝の礼。
- 10:30 : Franz-Josefs Hohe に帰還。小雨。
- 11:00 : 頂上は雲の中。写真数枚。カード投函。車で Heiligenblut へ。下界は日光も。
- 12:00 : 記念のバッジを貰い、ガイド料 3900 シリング払って全て終了。来年は初登頂 200 年祭で、再訪すれば美しい登頂記録証 (Urkunde) を呉れると Ernst は言う。
- 13:00 : シャワーを浴びて街に昼食へ。雲を被った Grossglockner を着にビール。これで十分。
- 15:00 : 昼寝。天候と食べ物を考え翌日ウィーンに帰る事にする。
- 17:00 : 近くのスーパーでビールと果物を買う。結局これが晩飯になる。

7月8日(水)曇。

07:00 : パッキング後、近くの Goessnitz 滝まで散歩。一時間。

09:35 : バスで Lienz、列車で Mittstaedtersee。中華料理店なし。Wien19:02 帰着。

(補注) オーストリアの山は日本の山より岩っぽく、高度感で約 1000m 高い。例えば、日本アルプスの森林限界は 2200-2300m、オーストリアでは 1200-1300m。したがって、3789m の Grossglockner は日本でなら 5000m 近い槍に登った様なもの。感激。満足。

(後日談) 登頂記<sup>1</sup>を友人に配布した。多くの反応があった。その中から私をもっと嬉しがらせてくれたものを一件引用しておく。当時在職中の猪川浩次氏からのものである。

グロスグロックナー登頂、おめでとうございます。

丁度前の日、私達はグロスグロックナー見学台で、ちらつくその山頂を見上げておりました。小西さんの宿泊したハイリーゲンブルートには4日の夜、ドロミテを見学した後の夜遅く9時前に到着し、ペンションに1泊、翌5日朝、フランツヨーゼフスヘーへに行き、厚い雲の中に隠れて見えない頂上付近を指し示しながら、山登りが縁で昨年結婚した息子夫婦にあの辺だよなどと言いながら時を過ごして居ました。レストランで軽い昼食をとっている内に外が猛烈に荒れ始め、レストランが揺れる程の風が出てきましたが、お陰で厚い雲が走り出し始めました。室内より外がよいと、風の比較的弱いレストラン脇のベンチに腰掛けて、雲間に瞬間的にちらつく頂上を双眼鏡で探しながら家族4人で時を過ごしていましたが、その内、グロスグロックナーから下山中の二人をヒュッテの下方の雪上に見つけました。この風の中、無事に下りられるものかと、興味はもっぱら彼らの動きに集中しました。ついたり離れたりしながらそれでも右手の岩場まで到着したのが見届けられましたが、そこで彼らは動かなくなったらしく、その上視界も悪くなり、双眼鏡では探せなくなりました。冷え切った体を温めようと再度レストランに入り、下山の二人が見える筈の席に陣取って暫く時を過ごしましたが、とうとうそれっきり見つける事は出来ませんでした。

レストランには登山者が十数人居て、どうやらこれから上り支度という状況です。外は相変わらずの烈風で、こんな中で女性も含めた登山者が、息子達の観測では少し軽装と思えると言う装備に身を包んで次々とレストランを出ていくのです。我々は車を出すのをためらっているというのにです。彼らが向かったのはグロスグロックナーではなく、レストラン右手のパノラマ通り?とかいう方向からアプローチする氷河正面の山頂のようでした。小西さんの話からすると、彼らは上の山小屋で1泊し、翌日登頂するつもりグループだったのでしょう。レストランに人が居なくなったのを見て、我々も兎も角車を出してみようとい事で車の方へ移動しましたが、意外やレストランの陰の方は風が弱く、下山には支障がありませんでした。山の天気、風の向きは解らないものだとつくづく思った事でした。

あの日の翌日、小西さんがあそこに登ったとは!! 驚きです。岩場に動かなくなった二人が無事下山出来たかどうかを心配していたその道を、逆に翌日登られた訳です。小西さんに脱帽します。

今朝 E-Mail を見て、この正月の妙な電話の意味がやっと解りました。

改めて、オーストリア最高峰への登頂成功、誠におめでとうございます。

平成10年7月13日

猪川 浩次

<sup>1</sup> 思い出にと書いた登頂記が仲間に好評で、勧められて IAEA のスタッフ誌エコーに投稿した。それ以来「書く」ことが増え、登頂記や旅行記をエコー、語学教室期報への寄稿が楽しい目標になった。